

日本総合歯科学会誌・第7巻発刊に際して

日本総合歯科学会
理事長 樋口勝規

本学会誌は、今回で第7回目の発刊を迎えることになり、編集査読委員会の小出 武委員長並びに委員諸氏の労に御礼申し上げます。

本学会は歯科医療に関する既存の専門的な学会とは異なり、統合型歯科医療や多職種共同医療を念頭に設立されました。最初は2008年に研究会として発足し、今年で8年目を迎えます。設立当時から初代理事長の小川哲次先生を中心に、アカデミックな団体であること、早期に学会組織へ移行して日本歯科医学会の認定分科会へ登録申請を行うこと、認定医制度を設けることなどの夢について検討してきました。その夢は徐々に実現しつつあり、2013年の第6回総会・学術大会において学会組織へ無事に移行することができました。次のステップは学会誌をより充実させて、アカデミックな活動を推進することだと思います。そのため組織改革の一つとして、広報・編集委員会から独立して編集査読委員会を設け、昨年の第7回総会・学術大会での承認後は小出 武常任理事に引き続き委員長をお願いし、査読制度を充実させて本年4月から新たにスタートしました。本巻は、委員諸氏の熱意ある査読のもとに、素晴らしい論文が結集した記念すべき雑誌となりました。日本歯科医学会の認定分科会の承認を受けるためには、雑誌の発刊および原著論文を5編以上掲載することが必要です。今後も会員諸氏の投稿をお願いする次第です。

さて、本学会は大学病院の総合歯科診療にかかわる診療科に勤務する人達の集まりですが、現段階では会員の大半が以前から所属している他の学会を主として活動されていることと思います。しかし、今後の日本は高齢社会へ突入し、これに対応すべく医療システムの変革が進められていることをご存知のことと思います。10年後の2025年には、後期高齢者が4人に1人を占める超高齢社会が到来し、専門診療科の縦割り診療だけではなく、総合的な見地に立った対応が必須となります。このような時代の背景をもとに、歯科医療

は個々の専門診療科の垣根を越えるだけでなく、医科歯科連携を視野に入れた統合的な診療形態が求められています。すでに、周術期口腔機能管理に関しては2012年より開始されました。今後は入院医療の機能分化、外来医療の役割分担および在宅医療の充実へ向けて検討が進みますが、歯科領域では地域包括ケアに如何に参画していくか、特に大学病院における役割を改めて検討する時期が来ました。さらに、多職種連携やプロフェッショナルリズムの研究・教育の重要性を発信していかなければなりません。したがって、大学関係者だけではなく学外の方にも数多く入会していただき、多方面からの検討が喫緊の課題と思います。もっとも、歯学という大局的な見地から検討し、科学の発展への貢献も我々の重要な責務です。したがって、本学会では基礎的研究は勿論のこと、社会歯科学や医療行動学などの研究者の活躍する場であることを望みます。本学会を利用して会員各位が議論・吟味され、醸成された結果を投稿していただくことを切に願います。本学会の認定医制度に関しては、ほぼ骨子が定まりました。HPが近日中に更新されますので、詳細を公開の予定です。暫定期間を5年間設け、2020年から本格運用の予定です。各位におかれましては、認定制度に関する規則をお読みいただき、認定医、指導医および認定研修施設の条件が適えば、早めに応募していただくようお願いいたします。

日本の医療だけではなく、世界の医療情勢や医学・歯学教育は大きく改革されています。若い歯科医師の人達が本学会を基軸に活動し、今後の歯科医療並びに歯学に関する研究・教育の担い手として羽ばたいていただければ、幸甚に存じます。

本学会の設立整備に関与してきた委員の一人として、各位が画竜に点睛されて本学会のlegitimacyを追及していただくことを期待しています。